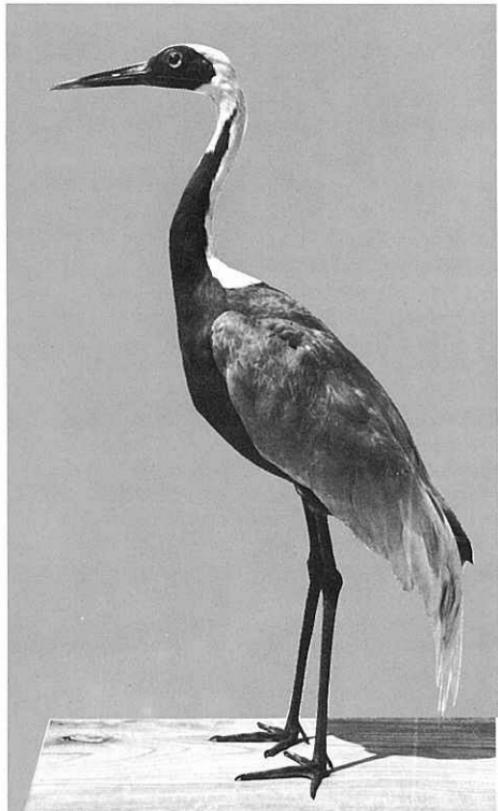


# 佐賀県立博物館報 №.33

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



## マナヅル

マナヅルは鹿児島県西海岸の出水市荒崎干拓へ、毎年10月中旬から11月中旬にかけて、ナベヅルの大群にまじって飛来し、冬をすごして翌年の2月下旬から3月中旬にかけて、シベリヤ方面へ飛去する。この渡来地は大正10年3月3日天然記念物、昭和27年3月29日以降特別天然記念物に指定され、渡来するツルの大群が保護されている。出水市へ渡来するマナヅルも近年増加の一途をたどり、出水市観光課の発表では、昭和49年582羽（総ツル数2743羽）、昭和50年781羽（総ツル数3649羽）となっている。

この剥製標本資料は、昭和51年3月2日、唐津市和多田で、金網に首をつっ込んでいたところを、東松浦郡相知町佐里下、田口広美氏が保護した。このことは町役場とおして県へ報告されたので、県が引取り手当をしたが3月5日死亡したので、県は三田川町の牧瀬 鑑氏へ死因の調査を依頼した。同氏が解剖した所見は「衝突による右肺内出血が直接の死因である」とのべ成鳥のメスであることが判明した。なお県は牧瀬氏へ「剥製の製作」を依頼し、本資料が完成した。県内には数少ない資料の一つとして貴重である。

翼長68cm、体高99cm、クチバシ長14cm

## 目次

• マナヅル	1
• 「九州の原始文様展」の紹介	2
• 佐賀県における隕石	3～7
• 日誌・行事のお知らせ	8

### 九州の原始文様展の案内

## 「九州の原始文様展」 — 繩文土器にその原点を探る —

■期　日 昭和52年1月15日(土)～2月24日(木) (月曜・祝日の翌日休館)

■会　場 佐賀県立博物館

■主　催 佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館

■後　援 文化庁・九州各県教育委員会・九州博物館協議会・佐賀県各市町村教育委員会  
(予定) 佐賀県小中高等学校社会科研究会・佐賀県小中高等学校造形教育研究会

■観　覧　料 個人 団体(20名以上)

大人 200円 150円

大・高生 150円 100円

中・小生 100円 50円

■講　演　会 この特別展の期間中、展示資料に関する講演会を催す予定。

■図　録 展示資料に関する図録及び目録を発行する予定。

### 主旨

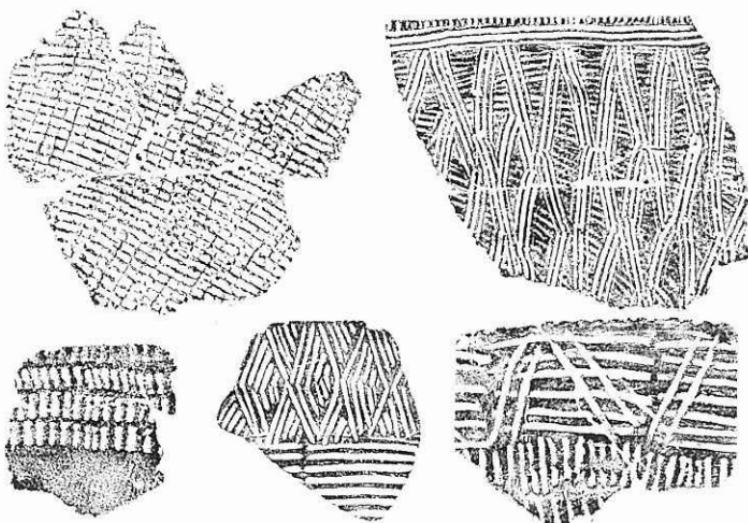
粘土を焼成することにより、「器」という生活利器の製作技術を学びとった縄文時代人は、日常生活の中でもとくに食生活のうえに大きな変化を生じさせるとともにこの器の平な表面に各種文様を描くことにより、美意識の表現を試みたのである。

そこで、九州の縄文土器の集成をおこなうことにより、各時代の文様変遷の集成・編年の確立と、美意識の解明、文化交流の追求や土器の科学的分析を試みることにより、当時の土器製作技術を解明し、現代陶磁器の原点ともいるべき縄文土器の総合的な究明を試みる。

### 展示概要

九州全域に点在する、縄文時代早期から晩期までの遺跡から出土した各種土器を集め、時代順に展観するとともに、土器文様の集成と文様構成の解明を主体とする。

- 各種文様の拓本
- 分解図
- 文様拡大図
- 施文方法の分析
- 各時代別土器の分布図
- 交流図
- 土器の製作工程及び製作技術



九州縄文時代早・前期の土器文様(その一部)

# 佐賀県における隕石

## はじめに

隕石についての古い時代の伝説めいた記録は西洋や中国にはいくつも残っている。日本でも続日本紀には天平8年（764）9月18日の夜、奈良の都で「水がめ」のように大きな星が落ちたという次の二文がある。

天平宝字八年九月壬子、軍士石村村士石櫃、斬押勝伝首京師、押勝者近江朝内大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂第二子也。（中略）起兵反。（中略）是其夜有星落千押勝屋之上、其大如盤。

また今日まで実物が伝えられているものには、近年確認された浜松市東郷筆ヶ瀬の隕石があり、元禄元年（1688）1月12日に落下したもので重さが 695g で、今でも増福寺という寺に寺宝として保存されている。

この例からもわかるように昔の人々は隕石を神秘的なものと考え、信仰の対象としたものが多い。後記する小城隕石も久しく寺の供物の中にあって、人々にあがめられていたという記録がある。

さらに嘉永、明治年間記録に文久2年（1862）7月15日江戸に星が落ち人心が動搖したことが次の二文で判断することが出来る。「文久二年七月十五日、今夜成刻星隕ル雨ノ如シ、古人曰、流星は小民流移の徵也と云う、是古人の格言、明年三月英人来り難題書翰出す。依之江戸表の動搖一方ならず、家を捉て他方へ走る者多し。」

ところで、隕石はこのように古くから人々の注意をひいたものと思われるが、この現象を科学的にとらえるようになったのは意外にも近年になってからのことである。

現在日本でまとめられている隕石確認は、前記した元禄元年、浜松市に落ちた筆ヶ瀬隕石をはじめとして約30

日本の隕石表

No.	名 称	種類	落 下 年 月 日	落 下 地	個数	重 量 kg
1	筆ヶ瀬	石	1688年2月13日	静岡県浜松市和田町筆ヶ瀬	1	0.695
2	小 城	石	1741年6月8日	佐賀県小城郡小城町	2	10.5
3	八王子	石	1817年12月29日	東京都八王子市附近	2	?
4	米納津	石	1837年7月14日	新潟西諸原郡吉田町	1	31.65
5	福 江	鉄	1849年1月	長崎五島列島福江島	1	0.008
6	氣 仙	石	1850年6月12日	岩手県陸前高田市氣仙	1	135.0
7	曾 根	石	1867年5月14日	京都府船井郡丹波舟根	1	17.1
8	大 富	石	1867年5月24日	山形県北村山郡東根町大富	1	6.51
9	竹 内	石	1880年2月18日	兵庫県朝来郡和田山町	1	0.72
10	福 富	石	1882年3月19日	佐賀県杵島郡福富村	2	11.62
11	田 上	鉄	1885年 発見	滋賀県大津市田上山	1	174.0
12	薩 摩	石	1886年10月26日	鹿児島県伊佐郡及び大口市	10	46.41
13	白 萩	鉄	1890年 発見	富山県中新川郡上市町	2	33.61
14	仁 保	石	1897年8月8日	山口県吉敷郡大内町	2	0.45
15	東公園	石	1897年8月11日	福岡県福岡市東公園	1	0.75
16	在 所	石鉄	1898年2月1日	高知県香美郡在所村	1	0.33
17	岡 野	鉄	1904年4月7日	兵庫県多紀郡篠山町	1	4.74
18	神 埼	石	—	佐賀県神埼郡	1	0.124
19	木 島	石	1906年6月15日	長野県飯山市木島	2	0.331
20	美 濃	石	1909年7月24日	岐阜県美濃市、関市、武儀郡及び山県郡	27	13.45
21	坂 内	鉄	1913年 発見	岐阜県揖斐郡坂内村	1	4.18
22	富 田	石	1916年4月13日	岡山県玉島市	1	0.60
23	田 根	石	1918年1月25日	滋賀県東浅井郡浅井町及び湖北町	2	0.906
24	白 岩	石	1920年 発見	秋田県仙北郡角館町白岩	1	0.95
25	櫛 池	石	1920年9月16日	新潟県中頃郡清里村	1	4.50
26	光 珠 内	石	1925年9月5日	北海道美唄市光珠内町	1	0.363
27	笠 松	石	1938年3月31日	岐阜県羽島郡笠松町	1	0.71
28	玖 刈	鉄	—	山口県玖珂郡	1	0.011
29	岡 部	石	1958年11月20日	埼玉県大里郡岡部村	1	0.194

件位である。そのうち本県内の事例は3件が知られているが、過曰佐賀大学名譽教授三好不二雄先生夫人嘉子様から後記する天保6年流星の一文を教えていただいた。貴重な郷土資料であるので、本篇に加えることにした。

### 小城隕石

小城隕石については、新天文学講座、第二巻、新版太陽系（編者古畑正秋。昭和38年11月30日初版。恒星社厚生開発行）の234頁の隕石の項に、日本隕石表があつて1741年 6月8日、佐賀県小城町、個数2個、重量10.5kgの表が出ているだけである。小城町としては重要な天文現象であったにもかゝわらず、殆んど詳細はわかつていなかった。

過曰、小城町在住の岩松要輔氏（唐津東高校教諭）の調査によって、小城鍋島文庫の日記目録の寛保元年（元文6年）4月25日に、

一、桜岡より子丑方雷のことく音有之、所々石落候義奥に書載之事  
また5月6日に

一、先月廿五日石落候江戸へ注進事  
という二項が掲載されていることが注意された。

ところが「隕石」の項の著者、国立科学博物館理工学研究部長村山定男氏の連絡から、次のような一文があつて、日記目録の前掲した二文しか残っていない今日、連絡いただいたこの文によって根本資料はみつからないが真実性を評価してよい記録だと思う。

明治32年出版された、「地学雑誌第14集」に、明治維新の時、8隻の幕府軍船を指揮し、北海道五稜郭に立籠り、最後の反撃をした榎本武揚が明治31年12月に書いた「流星刀記事」という、富山県白萩に落下した白萩隕石から日本刀をつくったという一文の中にある一節に、「余が親見せし中に、最も有名なる日本の隕石は、貴族院議員子爵鍋島直虎氏の珍藏せる所謂、七夕石なる者にて、同家の所伝によれば、この石は元文6年即ち寛保元年4月25日、同家の旧領地肥前国小城郡畠田村竹曲と称する一小村落の田圃の中に限ちし者にて……略……この星石はもともと大小二塊ありて大きい方は重量一貫六百匁、小の方は一貫百五十匁にして、小の方は先年同家より英公使バーカスの請に応じ英國博物館に寄贈し現に同館に存すという。この二石の比重は3.62にして石中に含める金属の類及その他の記事は、東京大学理科学院教師ダイヴィアース氏の報告書に存せり」とのべ、更に、小城鍋島家所伝、元文六年辛酉日記写

「四月二十五日、晴天

一、桜岡より子丑の方に当り如雷致鳴物所々へ石落申候委細奥書に載せり

五月六日

一、去月二十五日桜岡より子丑の方に当り、如雷致鳴物いた所々へ石降り申候依之江戸へ注進の趣き左之通一、先月二十五日巳の中刻晴天半清水当り小路通りより相見不黒雲出雷鳴之様に候得共雷電共驚申大太鼓を觸敷打候ことく其音凡そ十を計ふる内最初三四つは殊之外強有之候暫之内鐘之響之様成音も有之候山彦之響にて様々の取沙汰も仕候得共此段難盡筆紙尤も間もなく雲は消申候

一、右鳴り終り胸之様成黒き物左の所々に落申候に付早速出させ申候

一、掛目一貫百五十目、黒石一つ  
鶴原川副左林屋敷坪中へ落り下り候  
深凡五尺

一、一貫六百目、同一つ  
歲分之内植田之中へ落申候、深凡六尺余（<sup>④</sup>歲分は散分の誤認と思う）

一、同、五百四十目、同一つ  
北浦山之内

一、同、同一つ  
町裏、宮崎市佐給地内之中  
右之通に付自然御領中山など焼石吹出たる義共にては無之哉と北山筋其外奥山内迄改させ候得共左様之所不相見候

一、其節之鳴音佐賀其外聞合候處何も同前之鳴音にて為有之由に候乍去石落候所者別に沙汰無之候隣國之沙汰不相知候に付筑後筑前唐津柳川辺迄為聞合指趣候處別紙之通御座候（此別紙控無之に付相知申不）

一、掘出候石色形は共に何葉茂同様に相見之右石之内手太く有之候に付難指趣北浦山の内へ落候石手少く有之候故為御覽今度指趣申候以上…略…

このように榎本武揚が書き残している。「小城鍋島家所伝、元文六年辛酉日記写」から、4月25日（新暦では6月8日）晴天、午前11時頃、桜岡から北々東の方向に雷鳴のような物鳴りが10回ばかりづき、そのうち3、4回はとてもひどかった。雷鳴と同時に黒雲が出現したが、雷鳴音が消えると同時に間もなく、消え去った。鐘を叩くような響きや、山彦の響きなどもあって、とても筆紙では表現出来ない。落下した石は4個であって、異常なことであったので御領山中で焼石（熔岩）が噴出したのではなかろうかと北山筋、奥山内を改めさせたが異常なかった。また雷鳴音が異常であったので、筑後、筑前、唐津、柳川に原因があるのではないかろうかと思ひ、問い合わせたが特別に変わったことはなかったことなどがのべられている。

国立科学博物館に保管してある、大英博物館の目録に小城隕石について次のような英文の解説がある。「日本の佐賀県小城町に1741年6月8日、午前11時に落ちたものである。雷のような音の後に4個の石が落ちてきた。一つは約 5.6kg、もう一つは約 4.6kgそして残りの二つ

はそれぞれ約2gであった。二つの大きい石は長い間、小城の寺にさしだされていた毎年の供物の中にあった。一番大きい石は東京にある。(鍋島家)

標本 55256号。二番目に大きな石の主たるかたまりは41.75gであり、断片は166gである」ということが記載されている。

結局小城隕石は4個で最大の隕石は「七夕石」と称し小城鍋島家に保存されていたが、昭和20年5月の戦災・(東京都世田谷区)のため、その所在は不明である。英國に渡った隕石は貴重な天文資料として保存、展示されているといわれるが、残りの2個については、全く所在が不明である。小城町内の民家または社寺から、先祖から伝わった「大切な石」だということで「ふとした機会に発見されるかもしれない。

### 福富隕石

福富隕石については福富町史に古者の談話が記録され国立科学博物館に隕石2個が保存され、国立科学博物館から直接来島し落下地を調査しているので極めて正確な記録が残っている。以下福富町史から、その概要をのべてみたい。

福富隕石は明治15年(1882)3月19日、福富町北区掘下崩の畔に落下したことが「福富町史」から知られ、国立科学博物館の日本隕石コーナーに保管展示されている。正式には灰色球粒隕石で、大塊は7.2kg、小塊は4.425kgである。

落石時の記録を福富町史は、もうすでにくなられた古者、小野仁右衛門氏の談として、同氏が14、5才の頃で、はっきりした記憶は残っていないが前置きして、「その日は雷雨でもあります、ほのぐら空模様であった。午後1時頃、折しも東北から異常な音響がこえて、凄まじい音を最後に、物鳴りは止った。数日後、北区掘下崩の畔に石がおちたというので見に行ったら穴があいていた。人々はたたりがあると恐れ、またヤケドするなどと心配したが、掘り出しにかかっさ、深さ1米程であったと思う。筒井七左衛門さんが区長をしていたので、その家に保管された」というのである。その当時は科学知識の進まぬ頃で、いろいろの噂を生んで広がったことだと想像される。隕石は当時の県令によって博物館へ寄贈され、いまも次の書状が残っている。

佐賀県肥前国杵島郡福富村

筒井 七左衛門

明治十六年二月杵島郡福富村下降隕石

貳塊博物館へ、獻納候段奇特候事

明治十八年十月八日

佐賀県令從五位 鎌田 景弼

この書状は明治15年3月19日に落下したものを筒井七

左衛門氏宅に保管し16年2月博物館へ獻納、18年10月8日に県令によってしたためられたとみるべきだろう。

なお、その年に生れた子供に、男は石松、女はおいしと名付ける人が多かったということである。

また、落下時に記録されたという東京の博物館と長崎県庁(当時は長崎県と称した)の往復文書によると、3個落下し、2個を国の博物館へ寄贈し、残りの1個は将来地元の博物館施設に保管したい意向があったことが知られるが、地元の古老のお話では長い間福富町内にあつたらしい。現在ではその所在もはっきりしない。

### 神崎隕石

佐賀県内における隕石記録のうち、神崎隕石だけが、はっきりしない。日本隕石確認例のうちでも、最も資料の不足しているもの一つである。明治から大正時代にかけて、地質調査所から東京帝室博物館に出品されていたというだけで、実物の写真も現存していない。

昭和28年、国立科学博物館員が、地質調査所の標本を調査した時にも、かつて博物館で、神崎隕石と一緒に展示してあったという竹内隕石(兵庫県朝来郡和田山町落合)は保存されていたが、神崎隕石だけは見当らなかつたといわれている。

残されている文献記録として

「理学界」第八卷、明治44年(1911)、駿河鉄五郎編の「美濃隕石、附日本隕石略記」があり、その一頁に、「神崎号、一小不正形隕石の一方切り取られたものにして、褐黒色の外皮の上に數小窪あり、石質外觀共に薩摩隕石に酷似す。惜むらくは、落下的年月日明らかならず、且つ肥前神崎郡とのみありて、地名詳かにせず」とのべ、また明治39年和田維四郎編「日本の隕石についての研究」の中に神保小虎氏が英文で神崎隕石を報告している。駿河氏と大略同文であるが、現在の重量は33匁(もんめ)(124g)であることを述べている。このことから総合して明治20~30年ごろ、神崎郡のどこかで落ち、或は発見された124g(33匁)の隕石が、地質調査所に持ちこまれたと思われる。

もっとも前記の報告にあるように、明治19年10月26日に落ちた薩摩隕石(④鹿児島県伊佐郡及び大口市。10個落下。合計46.41kg)によく似ているということであれば、この隕石の一部片をたまたま神崎郡の人が、旅行などの際に入手し持ち帰り、そこから地質調査所へはこばれたということとも、全く考えられないことではないが必然性はうすいよう思う。

前記二文献によって、外観、形状、重さは明らかにされているが、何時落ちたか、神崎のどこに落ちたかははっきりしない。「神崎隕石」の文字記録だけは、日本隕石表の18番目にあげられているが、宇宙の天体の謎を秘

める神埼隕石もまた、その詳細な記録は謎につつまれている。

落下して100年も経ていないので、この隕石を裏付ける資料の発見が待たれている。

### 天保6年の天火（流星）

かねてから坂部家日記、野田家日記など古記録、古文書を解読し研究されている佐賀大学名誉教授三好不二雄先生夫人嘉子様から次の一文を教えていただいた。この一文から当時の人々が天火に対する考え方、観察の状況天火に対応する慣習などがうかがえて面白い。なお坂部家は佐嘉城西御門外にあった名家であって、落下時の当主は武雄邑主の舍弟にあたり、なかなかの器量人だったといわれている。

（坂部家日記は坂部八郎太夫明雅=武雄鍋島茂順の弟一とその養子である坂部三十郎明矩=武雄鍋島茂義の弟一によって記録されたもので三十郎明矩のものが主体となっており、三十郎明矩は側頭、御年寄等の職にあって、鍋島直正に重用された人である。）

### 坂部家日記より

天保六年七月廿一日、晴

一、近日天火処々江見候由ニ而、天火追レ之、此方も今晩も追セ候處、今夜五過比、茶ノ間中庭之上到而近ク、東北より南西江通り候ゆヘ、甚不安心ニ而、又々天火追相始、夫ニ而も落候付、急候ゆヘ、水せこニ而、家之上毎水を懸させ、猶又廻り事等厳密ニ申付候也、

天火は当時この地方での方言で流星のこと、この流星を追い散らすため箕（み）で空を扇ぐような所作をする当地方の民間慣習があったと、古の昔話として稀に聞いたことがあるが、坂部家日記の本文は次のように解釈できる。

天保6年7月21日 晴

近頃天火（流星）が方々で見られるという噂があるので、天火追が行はれた。この地方でも今晚、天火追を行ったが、五つ過（午後8時過）頃、天火が茶の間の中庭の上を、非常に近く東北から南西の方向に通ったので大変不安になってまたまた天火追を始めた。それでも天火が落ちたので、急いで家の屋根毎に水せこ（龍吐水）で水をかけさせ、又家の回りを見て廻ること等を厳重に申しつけた。

このように天火（流星）を追い散らそうとして天火追を行い、それでも天火が落ちるので家が火災になることを恐れて、水ポンプで屋根に水をかけさせ、更に家の周

りを巡回して火災防止につとめたことが窺われる貴重な一文である。

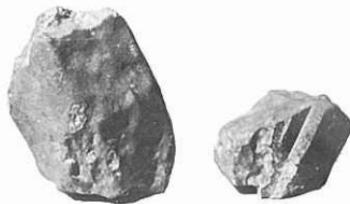
### おわりに

去る昭和50年11月13日夜、岡山県、広島県、香川県の瀬戸内海沿岸で、オレンジ色の光が走り、雷鳴のような爆発音がとどろき、丸亀市沖の高見島の東海面に消えた。この間2~3秒の時間で、多くの人々は秋の夜空にこの天文現象を見守ったという。調査した国立科学博物館は「流星よりも規模の大きい、ファイアボール（火球）だった」とのべている。自撃だけで、海面下に設したと考えられ潜水夫を使って数回調査したが、今まで破片さえ入手出来ず、資料確認は出来ない。本県の場合も神埼隕石は資料が見当らない。小城隕石も残り3個について現在皆目所在がはっきりしない。坂部家日記から天保6年の天火（流星）記録のように、旧家に残る文書・土蔵の片隅に残る由来不明の遺物、社寺に伝わる宝物、古文書類の中から、佐賀に墜ちた隕石を裏付ける資料が発見されることを期待している。

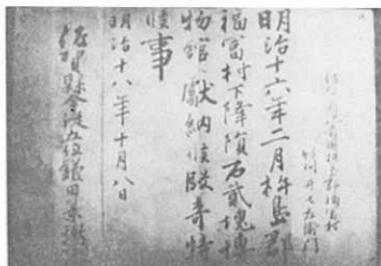
（手 琢 静 雄）



〔隕石資料・写真〕

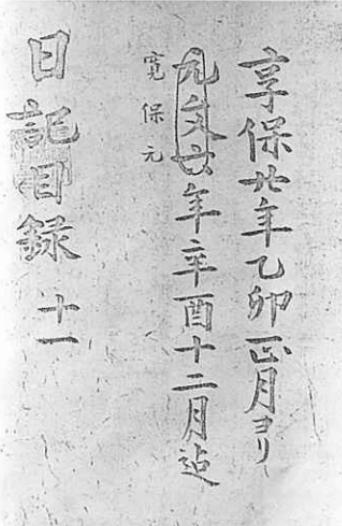


福富隕石  
国立科学博物館に展示されている隕石

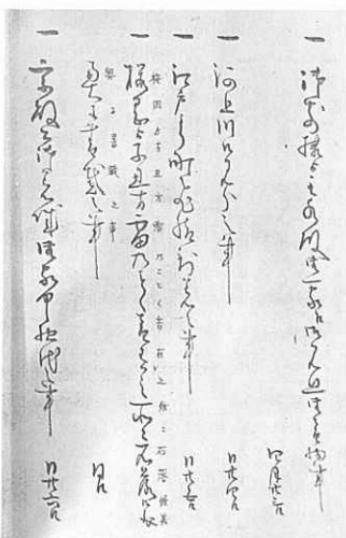


福富隕石の寄贈について  
の県令の書状

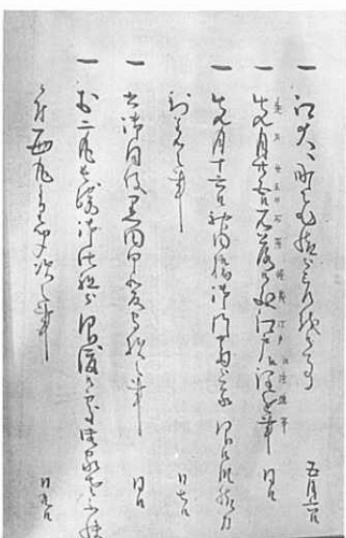
小城隕石の記録のある  
寛保元年 日記目録



小城隕石の記録  
寛保元年五月六日



小城隕石の記録  
寛保元年四月二十五日



## 博物館日誌

9月5日	「柿右衛門名品展」記念講演会 「近世工芸の装飾性」 講師 佐賀県文化財保護審議会委員 永 竹 威氏	10月10日 「若楠国体芸術展」開場	(観覧者数15,995名)
9月18日	皇太子殿下、美智子妃殿下「柿右衛門名品展」をご観覧なさる。	10月12日 ブラジル国佐賀県人会より佐賀県へ寄贈された「紫水晶」を展示	鍋島直泰氏御夫妻、「若楠国体芸術展」を観覧される。
9月19日	「柿右衛門名品展」記念講演会 「肥前陶磁研究の問題点」 講師 永 竹 威氏	10月22日 天皇陛下、皇后陛下、「若楠国体芸術展」をご観覧なさる。	高松宮殿下、高松宮妃殿下「若楠国体芸術展」をご観覧なさる。
9月25日	「柿右衛門名品展」記念講演会 「東西窯芸の交流」 講師 永 竹 威氏	10月29日 移動博物館を北波多村公民館にて開催 (31日まで観覧者数 493名)	
9月26日	「柿右衛門名品展」終了	11月 8 日 「若楠国体芸術展」終了(観覧者数17,069名)	

## ●行事のお知らせ

常 設 展			
佐賀県の歴史と文化展	52年 12月 5日～2月24日	大 人 50 (30) 大・高生 30 (20) 中・小生 20 (10)	佐賀県の地質や自然および先史時代から、現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史、歴史、美術工芸の各部門について、系統的に資料を展覧する。

(月曜・祝日の翌日休館) 団体は20名以上 ( ) 内は団体料金

常 設 展					
展 覧 会 名	会 期	観 覧 料 (内は団体料金)	展 覧 会 名	会 期	観 覧 料 (内は団体料金)
佐賀県高等学校美術展	12月 1日 12月 5日 会期中無休	無 料	肥前の近世絵画展	3月 5日 3月30日 会期中無休	大 人 250 (200) 大・高生 150 (100) 中・小生 100 ( 50 )
佐賀県学童美術展	12月 9日 12月14日 会期中無休	無 料	城 秀男教授 退官記念展	3月 6日 3月10日 会期中無休	無 料
第4回教職員美術展	12月18日 12月23日 会期中無休	無 料	佐賀大学教育学部 城 秀男教授 退官記念展	3月12日 3月16日 会期中無休	無 料
九州グラフィックデザイン展	1月 5日 1月 9日 会期中無休	無 料	土肥春嶽教授 退官記念展	3月12日 3月16日 会期中無休	無 料
九州の原始文様展	1月15日 2月24日 月曜・祝日の翌日休館	大 人 200 (150) 大・高生 150 (100) 中・小生 100 ( 50 )	美 術 科 卒業制作展	3月18日 3月21日 会期中無休	無 料

## ・新刊書案内 「肥前歴史の旅」

「若楠国体芸術展」第1部の図録として刊行。カラー写真4枚モノクロ写真約400枚を含め約170頁。

藩政成立の前後、藩政期の文教、幕末から明治にかけての科学技術、先哲者の書簡、肥前の工芸等各出品物235点を紹介。解説を付している。また「佐賀400年の由来」「肥前歴史の旅」「略年表」等を掲載し、佐賀の歴史を究めるうえで極めて参考になると思われる。価格1,200円(送料は別、総重量 850g)

博 物 館 報 第 33 号
発行年月日 昭和 51 年 12 月 1 日
編 集 大 圃 弘
発 行 佐賀市城内 1 丁目 15-23
佐 賀 県 立 博 物 館
印 刷 日 之 出 印 刷 株 式 会 社